

2023. 3. 19 (日) 使徒7:39~41

7:39 ところが私たちの先祖たちは、彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、

7:40 アロンに言いました。『われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き出した、あのモーセがどうなったのか、分からないから。』

7:41 彼らが子牛を造ったのはそのころで、彼らはこの偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を楽しんでいました。

<説教>

「モーセと神を冒瀆する者だ」とでっち上げられてユダヤ人たちから最高法院に訴えられ、弁明を求められたステパノは、(旧約) 聖書から神の民イスラエルの歴史を語ります。

「栄光の神」がアブラハムに現れ、みことばをかけて召し、約束をお与えになったことから始めて、モーセについて語るどころまで来ました。モーセは、神がアブラハムへの約束を果たすべくイスラエルの民をエジプトの奴隷から導き出して解放するために、神から遣わされ、その使命を果たし、神からその民に与えるべき生きたみことばを授かり語った人だとステパノは言います。こうしてステパノは、モーセを正しく認め、またモーセに現れみことばによって召し、お用いになった神に正しく栄光を帰しました。そして同時にそんな神とモーセに従わなかったイスラエルの民の罪を厳しく指摘します。それは神とモーセに従わず不信仰だったイスラエルの民の子孫である〈あなたがたも〉また先祖たちと全く同じ罪を犯していることを明らかにするためでした(7:51-53)。つまり、モーセと同じように神がお遣わしになった〈一人の預言者〉(37)イエス・キリストを信ぜず、殺しまでした罪、神への不信仰と反逆の罪です。ステパノもペテロがしばらく前に説教した時のように、人々にその罪の悔い改めとイエス・キリストへの信仰を語り、勧めることを望んでいたに違いありません。しかしユダヤ人たちはステパノの説教に最後まで耐えきれず、ステパノを殺すこととなります(54節以下)。

さて、ステパノの先祖たちイスラエルの民の罪はどういうものだったかステパノは言います(39-41)。出エジプト記の15章には、神の力でモーセを通してエジプトから解放されたイスラエルの民が大喜びでモーセとともに神を賛美したそのほんの数日後にはもう荒野で水が飲めないとモーセに向かって不平を言ったことが書かれています。更にその後、シンの荒野では食べ物がないとモーセに不平を言い(16章)、レフィディムでは水を求めてモーセと争い不平を言ったことが書かれています(17章)。そこで彼らは食べ物や水のこと〈エジプトをなつかしく思って〉モーセに逆らいました(16:3、17:3)。そしてそのとき既にモーセは彼らの不平は主なる神に対するものだと言っていました(16:7-8、17:2)。

そのイスラエルの民がシナイの荒野に入ると、神はシナイ山でモーセに十戒を中心とする〈生きたみことば〉をお与えになりました。その神のみことばをモーセから告げられた民は「主の言われたことはすべて行います。聞き従います。」と言いました(出24:3,7)。その後モーセは再びシナイ山に登り、幕屋建設に関する指示を神から受けるために四十日四十夜留まっていた。〈そのころ〉、イスラエルの民は〈子牛を造った〉のです。既に

民が「聞き従います」と繰り返し約束したことの中に、「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。」(出 20:4-5)という第二戒はありました。それにもかかわらず、また、「聞き従います」と自分たちからも繰り返し約束したにもかかわらず、でした。〈エジプトをなつかしく思って〉(欄外注「心の中でエジプトに向きを変えて」)とは、この場合は、「エジプトの偶像礼拝の様を思い起こして、エジプトのやり方に倣おうと心に決めて」というような意味でしょう。エジプトには「形」ある、目に見える「偶像」が沢山あったに違いありません。もちろん彼らはエジプトにいたときも〈アブラハム、イサク、ヤコブの神〉、即ち目には見えないけれども確かに生きておられ、みことばをお語りになり実現なさる神を信じており、エジプトの偶像礼拝には参加しなかったでしょう。しかし、エジプトを出た後、自分たちの〈指導者また解放者〉であるモーセの姿が四十日四十夜見えなくなって、民は〈われわれをエジプトの地から導き出した、あのモーセがどうなったのか、分からない〉と不安になりました。モーセは戻って来ると長老たちに言っていた(出 24:14)にもかかわらず、待ちきれず、モーセの言葉を信じ抜くことができませんでした。彼らはエジプトの民が彼らの手造りの偶像によって祭りをしていたことを思い出したのでしょう。偶像は人間が自分の手で造り、自分たちの目に見える範囲、手の届く範囲に置くことができるし、そのようにいつでも自分たちの思い通りに自由に取り扱うことができるので「安心」なのです。イスラエルの民はそのときも決して先祖たちの神、主なる神を捨てて、エジプトの神を取り入れて子牛を造ったわけではありません。アロンは「これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ。」と言い、「主への祭りだ」と言いました(出 32:4-5)。しかし、目に見えない神を、目に見えるように〈自分たちの手で造り、それを神として礼拝して、それで自分たちは神を確かに礼拝している、神に確かに依り頼んでいる〉と思って安心する、それが大きな間違いでした。彼らは、「自分のために偶像を造ってはならない。…」と言われる神の〈生きたみことば〉に〈従うことを好まず〉、かえって神を〈退け〉たのです。

もし第二戒が与えられていなければ、「知らなかった」と言い訳ができたかもしれませんし、神の大きな怒りを招くような〈大きな罪〉(出 32:21,30,31)に定められなかったかもしれません。しかし神は「わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がり、わたしが彼らを絶ち滅ぼす」と言われました(出 32:10)。〈宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして、手にしていたあの板を投げ捨て、それらを山のふもとで砕いた。それから、彼らが造った子牛を取って火で焼き、さらにそれを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエルの子らに飲ませた。〉(32:19-20)との余りに激しいモーセの怒りも、神の激しい怒りに倣ったものでした。

〈彼らはこの偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を楽しんで(喜んで、祝って)いました。〉(使徒 7:41) モーセを通して神から与えられた〈生きたみことば〉によって明白に禁じられていたにもかかわらず、自分たちの考えで、自分たちの手で造った神ならぬ偶像を楽しみ、喜び、祝い、安心するとは何という滑稽、自己満足、自画自賛、自己賛美、自己中心(「神のため」ではなく、どこまでも「われわれのため」)だったのでしょうか。神にも頼るけど、自分の考えと手で、早く手軽に安心するための保証となる物

を造りたい、そんな心と、そんな心から為される行いが、神と並べて自分にも頼ろうとする偶像礼拝の罪だとも言えるでしょう。霊であり、目に見えず、無限であるお方である神は、人が手で造った「物」、つまり形あるもの、有限なもの、朽ちるものによって礼拝されるお方ではありません。「物」そのものとしても、またそんな「物」の中に存在するお方としても礼拝されるお方ではありません。「神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」とイエス・キリストは言われました（ヨハネ 4:24）。私たちは聖霊と真理の生きたみことばによって示され導かれる仕方によって神に向かって礼拝を捧げるのです。人間が手で造った「物」に向かって礼拝することは神のみことばが教えていることではなく、神の激しい怒りを招く偶像礼拝なのです。

く